

**研究報告**

## 初期日系アメリカ文学の再考 —邦字新聞デジタルコレクションを活用して—

水野真理子

本稿は、スタンフォード大学フーヴァー研究所所蔵の邦字新聞デジタルコレクションを活用し、北米の西海岸を拠点に活動した作家たちによる、1900年代から1910年代頃までの初期日系アメリカ文学を再考するものである。先行研究ではまだ十分に検討されてこなかった、地域間の連続性や文芸人たちの移動、各邦字新聞の文芸欄の特徴などに焦点を当てる。具体的には、これまでの先行研究や一次資料に、デジタルコレクションで調査した記事を加えて、シアトルの文学活動の特徴を再確認し、さらに同時期におけるサンフランシスコ近辺での『日米』を中心とする文学活動の特徴について、比較の視点を持ちながら考察する。そして、シアトルで活躍していた文芸人たちがサンフランシスコに移動することにより、どのような影響が『日米』での文学活動に与えられ、1915年末から1917年にかけて隆盛する移民地文芸論の流れに繋がっていったのかを辿る。

### 1. はじめに

紀元前の古代から、人々が暮らす社会には、彼らの生活や歴史を反映する文学が生み出されてきた。1880年代に日本人が労働のためや立身出世の夢を抱いて北米に渡り、そこに日本人社会を作り出したとき、その日本人コミュニティにおいても、文学は、彼らの異郷における孤独を慰めるものとして、また彼らの生きた証を刻むものとして創作されてきた。1910年代から1920年代にかけて、日本語で書かれた一世世代による小説、短歌、俳句などの文芸作品は、「移民地文芸」と呼ばれ、西海岸地域を中心に邦字新聞の文芸欄を賑わせてきた。その一世世代の移民地文芸は、世代交代とともに英語で創作活動を行う二世世代の文学や、帰米二世世代を中心とする日本語文学の流れへと受け継がれていき、現代においても日系アメリカ作家や文芸人たちは、日本語や英語によって創作し、日系アメリカ人の歴史や文化を様々な表現方法や描写によって映し出している。

一世世代の日本語文学の歴史や文学活動の詳細については、これまで邦字新聞を主な資料として1990年代頃から研究が積み上げられてきた。主なものとしては、翁久允（六溪）（1888-1973）の移民

地文芸論に関する研究が挙げられる。まず山根和代や中郷英美子の先駆的な研究があり、その後、立命館大学の「翁久允研究会」による、翁の在米時代の新聞、雑誌記事を集めたスクラップブックの保存と、その資料を活用したシアトル社会や移民地文芸についての研究がある。特に山本岩夫は、移民地文芸論の流れ、その反響や意義について詳述した。その後、移民地文芸論の独自性という観点に、新たな切り口や考察を加える研究が続いた。日比嘉高は、日本の自然主義文学が与えた影響を分析することで独自性概念の再考を促し、クリスティーナ・バシルは、トランスナショナリズムや越境の観点から、翁が主張するコスモポリタニズムや移民地文芸の立場の両義性について考察し、複雑な二重性の問題を論じた。筆者も移民地文芸が持つ独自性を、翁のアイデンティティの変遷と関連づけることによって再考した<sup>1</sup>。

また翁が移民地文芸論を提唱する前後の一世世代による文学活動についても、翁以外の作家に着目した研究がなされ、例えば、菅野衣川、下山逸蒼、野口米次郎、長沼重隆、永原宵村に関する研究論文や評伝、作品の英語翻訳などがある<sup>2</sup>。さらに個別の作家に加え、古書店のネットワークや作品発表の場としての邦字新聞の役割など、移民地において文学が成立するための環境についても明らかにされてきた<sup>3</sup>。

このように研究の歩みは進んできたものの、これまでの研究の全体的傾向としては、ある特定の作

<sup>1</sup> Kazuyo Yamane, “Kyu-in Okina’s Contribution to Japanese American Literature Early in the 20th Century” 『季刊・新英米文学研究』20巻1号、1989年、2-7; 中郷英美子「“移民地文芸”の先駆者翁久允の創作活動—「文学会」の創設から『移植樹』まで」『立命館言語文化研究』第3巻第6号、1992年; 中郷英美子「翁久允移民地文芸の特徴—「生活」と「思想」について」『立命館言語文化研究』第4巻第6号、1993年、49-64; 翁久允研究会『立命館言語文化研究』第5巻5・6合併号、1994年2月には以下が含まれる。山本岩夫「翁久允と「移民地文芸論」、中郷英美子「『日米新聞』時代の翁久允—創作活動を中心にして」、桧原美恵「翁久允の描いた女性像—移民地アメリカにおける人間模様」、佐々木敏二「翁久允の作品・論説と時代の影」、坂口満宏「移民のナショナリズムと生活世界—シアトル日本人社会形成小史」; 逸見久美「翁久允とアメリカ—大正元年、冬の一時期帰国まで」。また、翁の在米時代の作品などを載せた多数の新聞切り抜き帳の複写が、立命館大学国際文化研究所『立命館大学翁久允研究会所蔵資料』として、立命館大学図書館に保管されている。その資料の目録も「翁久允所蔵資料目録」として含まれている。その他、翁の先行研究には、逸見久美『わが父翁久允』（オリジン出版センター、1978）; 逸見久美『在米十八年の軌跡—翁久允と移民社会 1907-1924』（勉誠出版、2002）; 稗田堇平『筆魂—翁久允の生涯』（桂書房、1994）; 糸井輝子「在米日本人「移民地文芸」覚書（1）アメリカの「亡者」—翁久允の長編二部作『悪の日影』と『道なき道』』『白百合女子大学研究紀要』第41号、2005年、117-134; 日比嘉高「移植樹のダンス—翁久允と「移民地文芸」論」筑波大学文化批評研究会編『テキストたちの旅程—移動と変容の中の文学』（花書院、2008）、46-61; Vassil, Kristina S. “Passages: Writing Diasporic Identity in the Literature of Early Twentieth-Century Japanese America” (PhD diss., University of Michigan, 2011), chapter 2; 水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史的変遷—1880年代から1980年代にかけて』（風間書房、2013）; Ikuko Torimoto, *Okina Kyu-in and the Politics of Early Japanese Immigration to the United States, 1868-1924* (Jefferson: McFarland and Company, 2017); Mariko Mizuno, “Seeking the Ideal Identity: Cosmopolitanism Advocated by Japanese Americans,” in *Crossing Cultural Boundaries in East Asia and Beyond*, eds. Reiko Maekawa, Darwin Stapleton, and Roberta Wollons (Leiden and Boston: Brill, 2021), 80-104 などがある。なお、翁久允の人生についての回想や主要作品は、翁久允他編『翁久允全集（全10巻）』（翁久允全集刊行会、1971-1974）に収められている。

<sup>2</sup> 主なものは以下である。篠田左多江「ウォーキン・ミラーの弟子—菅野衣川の生涯（1）」『英学史研究』27巻、1994年、151-164; 中郷英美子「日系一世たちの自己表現—下山逸蒼と伊勢田初枝の短詩形文学」『アジア系アメリカ文学—記憶と創造』（大阪教育図書、2001）、325-350; 糸井輝子「下山逸蒼資料について」『JICA 横浜—海外移住資料館—研究紀要6』2011年、49-65; 堀まどか『「二重国籍」詩人—野口米次郎』（名古屋大学出版会、2012）; 関雄一・経田佑介『草の葉の人—長沼重隆評伝』（ブルージャケットプレス、2019）; Sho-son Nagahara, *Lament in the Night*, trans. Andrew Leong (Los Angeles and New York: Kaya Press, 2011) .

<sup>3</sup> 日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ—移民文学・出版文化・収容所』（新曜社、2014）。

家や新聞、地域に焦点が当てられる一方で、時代および地域間のつながり、連続性などは見えにくくなっている。そうした点を補いながら、さらに包括的な文学活動の全体像を描くという作業は、まだこれから進めていくべき課題であろう<sup>4</sup>。例えば、シアトル中心の独身青年たちによる活発な文学活動が 1900 年代後半の特徴として挙げられ、その後は、1910 年代半ば頃からの『日米』を中心とする翁の移民地文芸論とその活動に注目が移ってしまい、シアトルで文学活動が盛んだった時代において、サンフランシスコ周辺の文学活動がいかなるものであったか、また『日米』以外の邦字新聞、例えば『新世界』などにおける文学活動はどうだったのかという、双方の地域間の比較や連続性などについては、まだ掘り下げる余地が十分に残っている<sup>5</sup>。

地域間の比較や時代的な連続性まで、考察を深めることが難しい理由の一つは、一世世代の文学活動の研究が、発表媒体である新聞、雑誌の丹念な調査に依存しており、そのような新聞、雑誌資料が必ずしも容易に閲覧できるわけではなかったという状況にもあると考えられる。ところが、近年、新聞や雑誌資料のデジタル化がさまざまな機関で進んできたことにより、研究を進めるための利便性が各段に向上した。特に顕著なものは、スタンフォード大学のフーヴァー研究所による邦字新聞デジタルコレクションである。このコレクションでは、米国本土においては 49 の新聞、雑誌、ハワイにおいては 30 の新聞、雑誌、さらにカナダ、メキシコ、アルゼンチン、ブラジル、中国他計 15 か国で、特に 20 世紀初頭から第二次世界大戦以後に発行された新聞、雑誌がデジタル化され、閲覧制限がかかった一部を除いて、ほとんどの資料は閲覧可能となっている。この邦字新聞デジタルコレクションに収められている新聞資料を調査することによって、各紙における文芸欄の特徴を分析する、あるいは埋もれていた作家や作品を発掘する、また文芸人同士のつながりや文芸人たちがどのように移動したのかなどを明らかにすることが、かなり実行可能になったと考えられる。筆者はこのデジタルコレクションを活用して、各紙の文芸関係記事を拾い出し、データベースとしてまとめる作業を進めている。本稿はその途中経過の報告であり、まだ推測の域を出ない考察もあるが、新たな視点や問題点を指摘するという意図のもとに、次の点に焦点を当てて論じてみたい。

その論点とは、シアトルからサンフランシスコを中心とするカリフォルニアへの文学活動の連続性、特に、翁がシアトルからカリフォルニアに南下し、『日米』で移民地文芸論を提唱する以前の 1912（大正元）年から 1913（大正 2）年にかけて、『日米』ではどのような文学活動が行われていたのかという点である。翁は、1913 年に郷里の富山出身の石黒清子と結婚したことにより、生計を立てるため文学

<sup>4</sup> 水野、『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷』では、1880 年代から 1980 年代までの、一世から二世、三世世代へと受け継がれていった日系アメリカ文学の歴史が描かれた。ただ、黎明期のシアトル、カリフォルニアにおける文芸人たちの移動や各地の文芸状況の比較や連続性を明らかにすることまではできなかった。日比、『ジャパニーズ・アメリカ』の巻末に収められている「北米日系移民文学・文化史関連年表」は北米で発行された新聞・雑誌、主要な日系アメリカ作家、および渡米経験のある日本人作家の主要作品が 1849 年から 1949 年までまとめてあり、各事項の年代的な連続性を把握するのに極めて参考になる。

<sup>5</sup> 全く研究蓄積がないというわけではない。日比、『ジャパニーズ・アメリカ』の第 3 章「日本語新聞と文学」は 1896 年から 1910 年までの『新世界』掲載の小説、講談、落語の作品リストを示し、移民新聞の役割を分析している。また第 6 章「一世、その初期文学の世界」では移民文学史の空白期と考えられる 1900 年前後を扱い、シアトルやサンフランシスコで発行された新聞、雑誌に掲載されている文芸関連の作品リストを提示している。そして初期日系移民文学の多様性を、内輪性/公器性、硬派/軟派、修辭的慣性/写実性などの概念によって説明している。日比、『ジャパニーズ・アメリカ』、68-84、126-150。

の道を諦めてシアトルの古屋商会で働き始める<sup>6</sup>。しかし、約半年後の1914（大正3）年5月、カリフォルニア州スタクトンで佐伯便利社を経営する広島県出身の佐伯卓造から、雑誌『太平楽』の編集を依頼され、もともと文筆で身を立てたいと希望していた翁は、スタクトンに移り、その編集に携わることを決意する。その際、翁の脳裏には、在米日本人社会の規模としても、文化的側面においても進んでいる、そしてさらなる発展を見せているカリフォルニアにおける日本人社会の様子が浮かんでいたようだ。シアトルを立ちサンフランシスコ近辺に移って、ジャーナリズムの分野で活躍する日本人が多いことを佐伯から聞かされた翁は、「そうした話の中から、私は古いカリフォルニア州の同胞移民社会が、新しいシアトル育ちの元気の良い人だちによって刺激を受けている情景を思浮かべることができた。」<sup>7</sup>と回想している。独身青年たちが、若いエネルギーを発散して文学活動を推進していたシアトルから、それら文学青年たちの一部がカリフォルニアに移動するという人の流れがあったようだ。それについては、竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』（1927）においても言及されている<sup>8</sup>。

さらに『日米』の紙面上で、多くの文芸人たちにより、移民地文芸論が積極的に議論された最初の時期は、1915（大正4）年11月あたりから1917（大正6）年にかけてである（資料1）<sup>9</sup>。翁が回想しているように、シアトルから『日米』へと移った人の流れが、サンフランシスコ周辺の『日米』で以前から活躍していた文芸人たちの文学活動と合流し、移民地文芸論の議論が湧き上がったのではないかと考えられる。本稿では、これまでの先行研究や一次資料に、邦字新聞デジタルコレクションで調査した記事を加えて、シアトルでの文学活動を再考し、さらにシアトルでの文学活動が盛んだった同時期に、『日米』の紙面がどのようなものであり、そしてそこで活躍していた文芸人や、彼らの文学活動および作品の特徴はどのようなものだったのか、シアトルにおける文学活動との比較の視点を持ちながら考察する。そして、1915年末から1917年にかけて隆盛する移民地文芸論の流れを辿ってみたい。

## 2. シアトルでの文芸状況

### 2-1. 『米国西北部日本移民史』、片山風雲の『あめりか』

シアトルでは1900年代初め頃から、かなり文学活動が盛んであり、移民史を記録した書籍や先行研究においても幾度となくそれは指摘されてきた。例えば、前述の『米国西北部日本移民史』の記述はシアトル文壇の様子をよく伝えている。この書籍が出版されたのは1927（昭和2）年であり、1900年代頃のシアトルの文芸状況とは、おおよそ20年ほどの時間差があるが、ほぼ同時代と言ってよく、当時の文壇の状況をかなり正確に伝えていると考えられるであろう。ここにはまず、シアトル文壇と呼ばれるものが何であったかが記されている。それは、『旭新聞』『北米時事』『大北日報』の三つの新聞

<sup>6</sup> 翁の経歴については、主に逸見久美、須田満編『翁久允年譜—1883—1973』（第三版）（翁久允財団、2020）を参照。

<sup>7</sup> 翁久允『翁久允全集3』（翁久允全集刊行会、1972）、394。

<sup>8</sup> 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』（大北日報社、1927）、591-593。

<sup>9</sup> 『日米』での移民地文芸論は二期に分けられるだろう。多くの文芸人たちが移民地文芸論とは何かを議論し始めた1917年頃までの前期と、『日米』の文芸欄を担当した翁が中心となり、移民地文芸論を深化させ、文芸に関心のある読者に移民地文芸論の必要性を訴え、作品を募集して創作を促そうとしていた1918年から1923年までの後期である。

が提供していた文芸欄や、『シアトル』『日米評論』などの週刊雑誌を発表の場とする、文芸人たちの活動、意見交換や人間関係、それらの総体を指しているようである。1907（明治40）年頃までは、論文、随筆、漫文のような類で、人身攻撃など、日本人社会内の対立を紙面上で繰り広げることも目立っていたようだ。その後、小説、評論、詩歌などが積極的に発表され、それらの作品では移民地での感慨、恋愛事情などを述べていたという。主な寄稿家としては、横山南山、太田虹村、池内柳流、武田硯澗、片山風雲、竹内青巒が挙げられている。その後、日本での自然主義文学や、イブセン、モーパッサン、ツルゲーネフ、トルストイの海外文学の潮流に影響され、移民地でも新しい文学を生み出そうとする青年たちが文学活動を繰り広げていく。その一人が名取稜々であり、彼が『旭新聞』において文芸欄を担当し、文学青年たちの創作意欲を掻き立てていたようだ。そして『旭新聞』において懸賞小説募集が行われ、そこから頭角を現したのが、渡辺雨声と翁久允であったと記されている。そのほか主な文芸人としては、亀谷荻骨、松井白花、内藤風外、宮内聖風が挙げられている。小説を発表するのは亀谷と翁で、彼らの小説を論じる批評家として異彩を放っていたのが、富田緑風であったという<sup>10</sup>。

上に挙げられている人物の中で、ここでは片山風雲に着目してみよう。シアトルの新聞、雑誌として、邦字新聞デジタルコレクションに収められているものには、『あめりか』『旭新聞』『北米時事』『日米評論』『大北日報』がある。この中で『あめりか』は、まさにこの片山影雄（風雲）により、1905（明治38）年3月5日に発行された月刊雑誌である。邦字新聞デジタルコレクションにおける『あめりか』の説明によると、1908（明治41）年2月23日で月刊誌は最終刊となり、のちに3月1日から『あめりか新報』という名で日刊紙となったようだ。しかし、財政難や内部闘争により年内に廃刊に追い込まれたという。片山の経歴についてはまだ調査中であるが、彼は『あめりか』が廃刊した後には、1908年11月22日に『日米評論』を発行し、彼が亡くなる1938（昭和13）年まで発行を継続した<sup>11</sup>。また片山は鯉坂愛助と共に編者となって、シアトルやポートランド周辺の商業や農業界で活躍している人物を紹介した『在米人物総覧』（1916）を日米評論社から発行している。シアトルの新聞、雑誌業界において、主要な人物の一人であったと言えよう。

では、この雑誌の特徴を確認してみよう。創刊号の1頁に掲げてある「『あめりか』発刊に就いて」において、片山はこの雑誌の目的を「我大和民族の海外発展と、在米同胞の利福とを増進するといふに外ならぬ」と抽象的に述べているが、日本と在米日本人社会における有益な情報を与えて、在米日本人社会の発展に貢献したいという意図だと考えられる。1頁目には、「人物評」として、シアトルで活躍している東洋貿易会社社長の高橋鉄夫についての紹介記事がある。そして、全体の傾向として、この雑誌にはかなり文芸記事が多く見られる。例えば、創刊号は6頁からなるが、3頁目にはアメリカの作家マーク・トウェインによる作品の翻訳「落機山下の怪譚（第1回）」が掲載され、その後第

<sup>10</sup> 竹内が記載したこれらの文芸人たちの名前は、翁の日記（全部で21冊余りあると推定される）や自伝的小説「海のかなた」などでもよく言及されている。また伊藤一男『続・北米百年桜』（北米百年桜実行委員会、1972）、100-103にも主要な文芸人たちの経歴が紹介されている。今後の課題として別稿にゆずりたいが、これらの人物の作品や活動などは、翁の日記や邦字新聞デジタルコレクション内の新聞資料も加え、今後整理し明らかにしていく必要がある。

<sup>11</sup> 邦字新聞デジタル・コレクションの『あめりか』『北米時事』の閲覧頁を参照。<https://hojishinbun.hoover.org/>

3回まで連載されている。また、4頁には「春季混題」として俳句が11首掲載され、「長閑さや登りて見たきタコマ富士」など、シアトルの情景を表現した俳句が見られる。5頁には懸賞俳句募集の説明もなされている。「課題 雛、春の月、柳、春雨、花七日、選者幽谷庵 締切 三月廿日限り 結果は本誌第二号の誌上に披露す 天賞 本誌一ケ年分、地、人、賞 同誌 半ケ年分」と記され、この雑誌においても新人作家の登竜門ともなるべき、また多くの読者を獲得するための懸賞作品募集が実施されていることが興味深い。第2号からも、短篇小说、俳句などが多く掲載されている。シアトルの日本人社会の情報を伝えるという目的のもと、文芸を中心とする創作発表の場と、文芸鑑賞の楽しみを読者に与える娯楽性を有した雑誌のようだ。

この雑誌には、文壇の様子を示した記事もいくつかある。門外漢と署名した人物による「舎都文壇の諸子」(1905年9月5日、1面)や、同人物による「舎都文壇の諸子(続)」(1906年1月1日、2面)、覆面冠者投と署名した人物による「文壇粉々録」(1906年2月5日、2面)がある。これらの記事では、シアトルで活躍する文芸人たちの様子が詳しく述べられており、今後これらの人物と人物評に関してまとめていけば、これまで『米国西北部日本移民史』『在米日本人史2』(1940)『続・北米百年桜』などにおいて言及されてきた文芸人、ならびにこれまで注目されてこなかった文芸人などについても明らかにすることができよう。以下に、上の記事で取り上げられている人物たちの名前を列挙しておこう。「舎都文壇の諸子」においては、石井石翠、初鹿野屈蟻、濱岡曲水、大西南海、河崎晩水、村山白洋、「舎都文壇の諸子(続)」においては、伊東精堂、原台東、久保朗達、柳澤柳葉、藤岡鉄雪が挙げられている。「文壇粉々録」においては、上に記載の人物の他、師岡紫紅、上田台陰、植原、片山風雲の名前が挙げられ、文士たちによる新年宴会の催しの計画について記載されている。

## 2-2. シアトル文壇の特徴—文学青年と酌婦の恋愛

シアトルの文壇の特徴として、『米国西北部日本移民史』に挙げられている内容で重要な事項は、俳句の会としての「沙香会」や「金曜会」、短歌の「コースト会」、文学全般について議論し合う場としての「文学会」、また新派劇に刺激された劇団の「革新団」、そして文学会と革新団が合流し、文士劇が盛んに行われたことであろう<sup>12</sup>。これらの事項については、『在米日本人史2』『続・北米百年桜』でも、また翁による自伝的小説「海のかなた」でも言及されていることであり<sup>13</sup>、シアトルの文芸状況の特徴としてこれまで認識されてきた点である。さらにここで注目したいのが、これらがシアトル日本人社会の料理屋を議論や活動の場として活用しており、そこから移民地の文芸人たちと酌婦たちとの関係が、主要な文学的テーマとなったという点である。これについても上述の書籍や先行研究によって幾度となく指摘されてきたのだが、一方で、これまで北米における在米日本人の文学といった場合には、1908(明治41)年頃から1912年頃までのシアトルの青年文士たちによる文学活動のみが主に論じられてきたため、おおよそ、どの在米日本人社会にも料亭や料理屋が存在し、そこを文士たちが

<sup>12</sup> 竹内、『米国西北部日本移民史』、586-593。

<sup>13</sup> 在米日本人会編『在米日本人史2』(在米日本人会、1940)、713-721。ここではPMC出版による1984年復刻版を使用した。伊藤一男『続・北米百年桜』(北米百年桜実行委員会、1972)、83-112；翁久允「海のかなた」『翁久允全集2』(翁久允全集刊行会、1972)。

交流の場として、懇意になった酌婦との恋愛模様などを作品に描くことが、初期日系アメリカ文学の典型的な傾向だと、早計な理解に陥ってしまう危険性があったようにも思われる。しかし、これは特にシアトル文壇においての特徴であり、サンフランシスコでも同様の文学作品が見られたのかどうかは、再調査する余地があるだろう。これに関しても今後の課題であるが、ここではシアトル文壇における酌婦たちと文芸人たちの関係について、もう少し考察を深めてみよう。

まず料亭における文士たちの活動についての例を再確認しておきたい。例えば、沙香会の会合場所はたいてい料亭まねきであり<sup>14</sup>、翁が提唱したと言われている文学会の発会式は料亭八千代においてであった。さらに文士劇に関する次の記述に着目しておこう。

文学会の連中も又演劇に興味をもち、中にも佐藤儀とか、内藤風外、大林黒眼子とか言つたやうに、劇の研究に没頭してゐたものもあつたが、たゞ漫然とした芝居気から文学会と革新団が相近づき、終にそれが動機となつて文士劇が盛んに行はれた。三輪堂の三ちやんを中心として竹内青巒、佐々木黄瓦洞、西方更風など言ふ連中が、大童になつて舞台に上つたのもその頃だつた。斯う言ふ傾向は、自然、文学青年達をして、料亭に興味をそゝらせ、天涯遊子の淋しさから、酌婦の美に憧がれ、時間と金があつたら、酒と女にひたるやうになつた。そして、それは又彼らの文学的唯一の材料であり、刺激でもあつた。荻骨、雨声、六溪、等の小説の材料は主としてそれらの社会を中心としたものであつた<sup>15</sup>。

ここには、文学会と演劇の革新団、そして文学青年たちが料亭で集まり、酌婦に魅了され、そのことが青年文士たちによる文学的材料となり、数々の小説に描かれてきたことが説明されている。加えて、シアトルにおける他の雑誌記事からも、文士と酌婦との関係が見て取れる。酌婦をめぐる青年文士たちの恋愛模様は、甲木鉄血「お秀とお雪（全5回）」（『日米評論』1911年10月22日～11月19日）にも露骨に記されている。料亭まねきで働く酌婦お秀とお雪が、どのような客層を掴んでいたのかが説明され、羽振りの良い男性客に人気のあつたお雪とは対照的に、お秀は文士たちを好んで接待し、「文士にして而して美男の男子を愛す。即ち池邊苔華、翁六溪、富田緑風皆、お秀の愛恋の人たるに至ては頗る奇なる対照ならずんば非ず」<sup>16</sup>と評されている。

さらに、上の記事で言及されている翁の作品で、酌婦との関係をテーマにしたものを紹介しておこう。例えば、1912（大正元）年1月、『旭新聞』の新年号懸賞小説一等を得た「三百十二番」<sup>17</sup>が挙げられる。この短篇では、人妻である酌婦お民に恋慕する青年平木が、お民と肉体的関係を結ぶことを期待して、部屋番号312のホテルの一室で彼女を待つ。しかし不義の関係を結ぶまいと固く決心しているお民を前に、彼の願望は叶えられず、彼女への未練を残しながらシアトルを離れ、田舎町へ移る。この作品について翁は、この小説が一人称で書かれたために、自分の告白だと読者に勘違いされたが、

<sup>14</sup> 沙香会の参加者は、初鹿野梨村、菅野芝華郎、高島淡影、本田越民、村岡鬼堂、渡辺雨声、翁六溪（久允）、富田緑風、さらに、大谷笛水、佐々木黄瓦洞、竹島素水、太田茜岡、桑原閑敞らであったという。

<sup>15</sup> 竹内、『米国西北部日本移民史』、589-590。

<sup>16</sup> 甲木鉄血「お秀とお雪（2）」『日米評論』10月19日。

<sup>17</sup> 翁久允『翁久允全集5』（翁久允全集刊行会、1971）、261-268に収録されている。

実際には翁が慕っていた酌婦お秀から聞いた話で、平木のモデルは文士仲間の富田緑風であると回想している<sup>18</sup>。また、その当時の移民地の独身青年たちの文学に傾倒する心情については、「荒寥な移民地の生活では青春の慰安は文学の外になかった。文学から劇となり、そして音楽となってゆくのだが、そうした過程の中に恋を求め、恋の相手としては酌婦より外になかったのである。」<sup>19</sup>と翁は回顧している。若い青年文士たちが、寂寥感に襲われながら移民地で生活している。そして女性の少ない移民地においては、恋慕する相手として唯一の存在が酌婦であったこと、これらの要素が重なり合って、以上のような文学的特徴がシアトルで生まれたのであった。

その後のシアトル文壇の様子について、『米国西北部日本移民史』では、1912（大正元）年以降、すなわち明治時代から大正時代に移ると、各文芸人たちが青年期から壮年期に入り、各人が別の職業に就いたり、また各地へと移動していったことも影響し、文学活動は衰退していったとまとめられている。文芸発表の重要な場であった『旭新聞』が終刊したことも衰退を決定づけたようだ。その後の動きについて、「そして寧ろ加州に文芸運動が復活され初めた。山中曲江、松原木公等の文芸に理解ある編集者がゐて、シアトルの全盛的文芸運動が、茲にしばらく栄へたのであった。」<sup>20</sup>と記されている。翁は佐伯卓造より『太平楽』の編集のためにスタクトン行きを勧められたとき、シアトルからカリフォルニアへの文士たちの移動について教示されたが、その回想において、山中曲江と松原木公についても言及し、「最初シアトルに上陸して勉強した人達には優れた人々が多く、近年どっとシアトル育ちの人々が南下した。松原さんでも、それから日米新聞の主筆山中曲江さんでも、今ではカリフォルニアの大きな指導者となっております。」<sup>21</sup>と述べている。シアトルからカリフォルニアに移動した人々の詳細については、移動したということに関する言及はあるが、実際のところ、詳細な記述はあまり残されていない。『米国西北部日本移民史』においては、シアトルの松原が『新世界』に入社するために南下したこと、またカナダのバンクーバーで活躍していた山中が、同時期に同様に南下したことのみ記されている。この記述の文脈上、彼らは若い青年というより中堅の年代に当たる文芸人として紹介されている<sup>22</sup>。

現時点では資料が少ないという状況において、翁の自伝的小説「金色の園」は、回想という形ではあるが、かなり有用な情報を提供してくれている。例えば、翁がスタクトンに到着したとき、波止場に出迎えてくれた佐伯卓造とともに松原の自宅を訪問した。そこで、シアトルの『北米時事』の記者であり、サンフランシスコに移った高村経徳とも再会している<sup>23</sup>。さらに、山中は翁に長編『悪の日影』を『日米』に連載することを勧め、作家としての更なる道を開花させてくれた重要な人物である。翁の回想によると山中はカナダの『大陸日報』で活躍していたが、後にシアトルの『北米時事』の記者となり、その後サンフランシスコの『日米』主筆に招聘されたという。また、翁が山中の自宅を訪れた際には、「日米系統の文士で長沼重隆とか明石順三とか阿部四郎とか、記者の伊藤七司」などを

<sup>18</sup> 翁、『翁久允全集 2』、254。

<sup>19</sup> 同上、256。

<sup>20</sup> 竹内、『米国西北部日本移民史』、593。

<sup>21</sup> 翁、『翁久允全集 2』、394。

<sup>22</sup> 竹内、『米国西北部日本移民史』、588。

<sup>23</sup> 翁久允『翁久允全集 3』（翁久允全集刊行会、1972）、2。

次々に紹介してくれたようだ。さらに翁に長編連載を勧めた山中の意図としては、「彼もシアトル出身なものだから桑港に来てみると桑港には生え抜きの文士たちがおり、そこへシアトルで文士だった私が来たから、南北の文士らをおだてて創作を競り合わせようと考えていたようだった。」<sup>24</sup>と記している。ここから、シアトル育ちの文芸人とサンフランシスコ育ちの文芸人とを合流させ、新たな文芸を作り上げようとしていた山中の構想が目につかぶ。ちなみに、シアトル時代に信濃太郎の筆名で活躍していた清沢湧も南下し、『日米』のライバル紙『新世界』で健筆を振るった。ここに記載した人物たちが論議を交わした移民地文芸論については、後ほど見てみよう。

### 3. サンフランシスコでの文芸状況

#### 3-1. 1906年から1913年までの『日米』の文芸欄、文芸記事

ここまで、1900年代から1912年頃までのシアトル文壇の様子を、『米国西北部日本移民史』の記述を再確認しながら、邦字新聞記事も参照していくことで、その特徴をまとめてみた。では、シアトルで文学活動が盛んだった頃、サンフランシスコの特に『日米』ではどのような文芸欄が見られたのだろうか。

1899（明治32）年4月3日に発刊した『日米』は、創刊号の第3面に、すでに「文苑」という欄を設け、詩と漢詩を掲載している。1903（明治36）年10月25日2面には、「懸賞短篇小説募集第三回」の知らせがあり、また10月25日が日曜であることから、文芸欄「日曜文学」の頁が加えられている。そこには懸賞小説選外の作品で、白峯という人物による「茸狩（上）」が掲載されている。シアトルにおいてもそうであったが、『日米』でもかなり早い時期から懸賞小説募集を行っていたことがわかる。また、花のやという人物による通俗的な小説「裏と表」の連載もある。1905（明治38）年7月4日には、『日米』2000号を記念した特集号が発行され、全体で44頁の紙面があり、多くの文芸作品が掲載されている重要な号である。42面、43面には小説、俳句、詩が掲載され、44面は英文欄になっている。これまで筆者は、マイクロフィルムで保存された『日米』の紙面調査によって、『日米』では成長していく二世読者のために、1925（大正14）年に初めて英文欄が設置されたと捉えてきた。しかし1905年の新聞資料をデジタルコレクションで閲覧することが可能となったことで、1925年よりも前に一時的ではあったようだが、英文欄が設けられていたことが明らかとなり、その点においても認識の修正が必要であろう。およその紙面構成としては、平日は全体で8頁、1面に「文苑」欄があり、短歌や俳句などが掲載され、8面に日本からの転載だと推測される連載小説が掲載されている<sup>25</sup>。

1906（明治39）年4月18日にサンフランシスコ地震が起きたことで、『日米』の新聞発行も困難を極めたようだ。邦字新聞デジタルコレクションとしては、1906年3月27日までの『日米』が保存され、その後は約一カ月間以上保存がなく、5月9日から1906（明治39）年7月25日まで保存されている。その後は1907、8、9、10、11年まで長期にわたり保存がなく、1912（大正元）年9月9日から再び閲覧することができる。この1906年5月9日から7月25日までの紙面を通観してみると、以前設置されていた「文苑」欄や新聞連載小説など、文芸記事や文芸欄は全く見られない。サンフランシ

<sup>24</sup> 同上、26-27。

<sup>25</sup> 作品全体の数量的把握、内容に関する質的把握とそれらの分析は、今後の課題としていきたい。

スコの在米日本人たちは、おそらく被災した日本人社会の復興に懸命であり、文芸記事を発表するだけの余裕がなかったことが容易に想像される。ただ、文芸に関連する記事としては、日本の書籍を輸入販売していた青木大成堂の広告記事が興味深い。「青木大成堂はバインにてフィルモア街近くに以せん[以前]の通り書籍店を開始したるが同店にてた小[多少]の書物来り 又た近刊及雑誌も太分来りくれば斯く直に開業○ることを得たるなりと」<sup>26</sup>という記事が、1906年5月10日の3面に掲載され、困難の中でも開業していることが窺える。さらに5月12日の1面には、「弊店義今回大シン災ノ為メ書籍悉[ク]皆鳥有ニ帰シ候所 幸ニチャイナ○ニテ澤山着荷 左ノ所ニ於テ營業を開始致シ 弊店独特の廉価ヲ以テ大方諸君ノ御需ニ応ズベク候」<sup>27</sup>と、書籍を安価な価格で提供し、顧客の需要に応えたいとの広告が掲載されている。震災という困難を極める状況の中で、新聞に発表される文学活動は見られなかった。しかし、その厳しい毎日の中で、おそらく文学も含んでいたと考えられる書籍が、人々に必要とされていた状況が表れている。

では次に、閲覧可能な1912年9月9日からの文芸欄を確認してみよう。この1912年という時期は、シアトルにおいては、時代が明治から大正に移り、壮年期へ向かっていく文士たちが散在し、文壇が衰退していく頃と捉えられるが、『日米』の誌面にはどのような文芸欄、文芸関係記事が見られるのだろうか。月曜日から土曜日の平日は、8頁から成る紙面であり、平日の1面には、「日米短歌」欄が頁の中央に設けられ、5首から10首程度の、移民地の文芸人たちによると考えられる短歌が掲載されている。例えば、1912年9月11日の『日米』1面では、羅府 捨小舟という人物が「懐郷」と題し、「ふる郷は盆の十三日のにひなめの八十の垂穂の米○くところ」「月今宵源氏車の浴衣来て君と踊りし十八の秋」など、移民地ではなく故郷における感慨を詠った4首が寄稿されている。また、1912年9月19日の『日米』1面では、羅府 行々子という人物が「初秋」と題し、「今朝の空碧く透りてやはらかに星旗におつる日のしづかなる」「いちはやく店の飾りに秋みする 廣<sup>ぶろーどろ</sup>華街<sup>あー</sup>の夜の賑ひ」など他全8首を寄稿している。これらの歌は、日本ではなく、アメリカにおける初秋の風景を切り取っている。詠み手は、あるときは日本を懐かしみながら、またあるときは今、自分たちが居住している異国の地での感慨など、さまざまに表現している。そして平日の8面にはたいいてい、日本の作家の転載と考えられる連載小説が掲載されている。1912年9月以降は、日本の小説家、劇作家の小林蹴月による小説『灯』が連載されている。日曜には4頁分の日曜附録が加わり、合計で12頁の紙面となっている。例えば1912年9月22日の日曜附録の1面（全体を通しては9面）に文芸関係記事が多く掲載されている。「日曜論壇」には茂木斜風による評論「墨西哥の文明」、上村知清の恋愛を扱った小説「男と女（恋愛神聖論者に）(1)」、天牛生による随想「住み變<sup>か</sup>へ(7)」、また紫暝生による、移民地の駆け落ち事件をテーマとしている短篇「湯戻り」他、漢詩や川柳も掲載されている。そして日曜附録の4面（全体を通しては12面）は英文欄である。

1913（大正2）年の『日米』も、1912年と紙面構成や文芸関連記事の配置はほとんど同じである。ただ元日には全体で36頁という豪華版が発行され、その中に26頁分の日米新年号附録が含まれてい

<sup>26</sup> 『日米』1906年5月10日、3面。判読不可能な字は「○」で記した。また文意を把握しやすいように、括弧内は筆者が補い、適宜、スペースを空けた。

<sup>27</sup> 『日米』1906年5月12日、1面。

る。新年号附録には懸賞募集で当選した小説、詩、短歌、俳句、随想や政治家および知識人たちによる評論など、文芸関連の記事が目白押しである。1913年1月1日からは三島霜川と徳田秋声による小説『妻の心』の連載も開始されている。

### 3-2. 長沼重隆、明石順三の文学観と作風

この1912年から1913年の紙面を通覧した上で、次に注目すべき具体的な人物として、長沼重隆、明石順三を挙げてみよう<sup>28</sup>。彼らは文芸欄において夥しい数の詩、戯曲、劇評などを寄稿している。そして長沼に関しては、近年、初の評伝も出版され彼の文芸活動の詳細も明らかになってきている<sup>29</sup>。そして明石については、これまで宗教家や良心的兵役拒否者として、その思想と行動が注目され、研究されてきたが、長沼の親友として、彼とともに文学活動を行っていた文芸面においては、まだほとんど論じられていない。

シアトル時代の文芸人たちについては、資料が極めて少なく、経歴についてその詳細を記すことが現段階ではまだ困難であるが、長沼と明石については先行研究が存在するため、彼らの経歴をここで紹介しておこう。長沼は、1890（明治23）年1月17日、東京市神田区に、父稲置と母キシの四男として生まれる<sup>30</sup>。5歳で父を亡くし、8歳で母とも死別し、祖父に育てられた。1907（明治40）年、三条中学校を卒業し、翌年、米国行きを祖父に願い出て上京した後、力行会に入会する。力行会とはキリスト教（プロテスタント）の牧師、島貫兵太夫が主宰し、アメリカへの憧れを抱く青年たちを指導して、渡米を奨励する組織であった。同年3月に日本郵船の貨客船丹後丸で横浜からシアトルに向かい、シアトルからサンフランシスコに上陸した。のちパークレーに移り、スクール・ボーイをしながら、グラマースクール、ジュニアハイスクールに通う。1909（明治42）年頃、「金門詩会」「小鼓社」の同人となり詩や短歌を創作、『日米』の新年懸賞応募で詩「夢の扉」が二席を得るなど、渡米後早い時期から積極的に作品を創作し、邦字新聞に発表している。1914（大正3）年には『日米』の客員文芸記者となり、劇評を担当した。この時期に、翁も南下して1915（大正4）年6月から『日米』に長編小説『悪の日影』（全99回）（1915年6月3日～9月16日、1面）を連載し、植民地文芸、移民事文芸論などの議論を『日米』紙上で交わしている。その後、1918（大正7）年頃からは、南カリフォルニア、ユタ州、西ヴァージニアなどで働いている。ホイットマン研究への関心から、アメリカの伝記作家ホレース・トローベル（Horace Traubel）とも親交を持ち、1919（大正8）年には、ニューヨークへ出向き、トローベルを訪問している。同年9月には日本郵船ニューヨーク支店に勤務した。1920（大正9）年、日本郵船東京本社の正社員となり、日本に帰国する。帰国後、日本郵船で働きながら、トローベル、ホイットマンの研究書を出版するなど、学術的な業績も積み、ホイットマン研究者として知られていく。

関・経田『草の葉の人—長沼重隆 評伝』によると、長沼は1908（明治41）年あたりから、『日米』

<sup>28</sup> 平井櫻川という人物も多く文芸欄に見られるが、紙幅の関係上、またこの人物の詳細についてはまだ定かでない部分が多いため、別稿にゆずる。

<sup>29</sup> 関、経田、『草の葉の人—長沼重隆 評伝』。

<sup>30</sup> 経歴については、関、経田、『草の葉の人—長沼重隆 評伝』を参照した。

へのかなり積極的な寄稿者であったようだ。数多くの作品が掲載され、筆名も長沼召水、青梅生、幽香子、磁多香、朱鳥子など多数である。本稿では、まだ長沼の作品全体を論じるころまでは深めることができないのだが、先行研究である『草の葉の人』を参考にしながら、その作品の主要な特徴を記すと、1909（明治 42）年頃は長詩や短歌が多く、特に詩については日本語の五七調のリズムに合わせて、多感な青年が感じる恋愛をめぐる煩悶や苦しさを歌っている。また、彼は外国文学の特に世紀末文学に関心が高かったようで、1910（明治 43）年には、オスカー・ワイルドについての「ワイルド論」を『北米文学』に、また 1911（明治 44）年にはフランスの舞台女優サラ・ベルナルについての「サラ・ベルナル論」を日本の文芸雑誌『スバル』（7号）に発表している。外国文学に傾倒し、また演劇にもかなり興味を持っていたようだ。

長沼の文芸論や文学観については、今後より緻密な考察を行っていく必要があるが、翁がシアトルから南下する以前には、まだ明確な移民地文芸論なるものは論じていないと推測される。例えば 1913（大正 2）年 1 月 1 日に寄稿した「選の後に」を取り上げてみよう。この当時の彼は『日米』の長詩と短歌の懸賞募集作品の選を任されていた。この選評では長沼は、応募作品に対してかなり厳しい評価を行っている。

内面的にも果<sup>はたくわいめんてき</sup>外<sup>(ママ)</sup>面的にも極単調なそして繁忙な生活を送つてゐる人の多い此植民地で、優れた芸術の作品を、少なくとも今の所求めやうとするのは、求むる方に却つて無理があるといはねばならぬ。だから今度にしても自分は善い結果を得なかつたといつてさまで驚きもしなかつた。而し作品の巧拙は別として、何か新らしい分子を見出したいといふ願ひはあつた。夫れが例え<sup>おさ[な]</sup>稚<sup>(ママ)</sup>くてもいい、自己には真実なる批判家であり、謳歌者であり、自然には熱烈な憧憬者である詩人の緊張した作品が見たかつたのである。芸術品を<sup>マ</sup>紂<sup>マ</sup>度するには、まづ其の人のインデヴェジヨアルな気品を問はなくてはならない<sup>31</sup>。

1913 年には、まだ移民地という言葉は定着しておらず、植民地という言葉も使用されていた。長沼は単調でかつ多忙な毎日を過ごす在米日本人社会からは、優れた作品が生み出されにくいことはやむを得ないとしつつ、「インデヴェジヨアル (indivisual) な」、すなわち個性を持った作品の登場を期待していたと述べる。ここでは、創作者本人の個性を重視した作品を切望していることがわかるが、のち 1915（大正 4）年末から翁が主張する移民地文芸論、すなわち移民地色を全面に出した、移民地独自の作品の出現を期待しているかどうかは明確になっていない。

次に明石の経歴を紹介しよう<sup>32</sup>。彼は 1889（明治 22）年、滋賀県坂田郡に生まれる。代々、彦根藩の藩医を務めた外科医の家柄であったようだ。兄二人が早逝したことで、ただ一人の子供となり、医師として家業を継ぐことを期待されたが、血を見るのを嫌悪したため、その道には進まなかった。彦根中学を二年で中退した後、1907（明治 40）年に渡米を志して上京し、力行会に入会する。1908（明

<sup>31</sup> 長沼重隆「選の後に」『日米』1913 年 1 月 1 日、36 面。

<sup>32</sup> 稲垣真美『兵役拒否した日本人一灯台社の戦時下抵抗』（岩波書店、1972）、2-19；四竈揚、関田寛雄編『キリストの証人たち一抵抗に生きる 4』（日本基督教団出版局、1974）、102-145。

治 41) 年 2 月、長沼と同船し、同室で過ごしたことで意気投合した。サンフランシスコに到着後、カリフォルニアの鉄道や農園で働き、後にサンフランシスコ市内のアメリカ人家庭でスクール・ボーイとして働きながら、市内の図書館に通うなどして読書にいそしんだ。明石は、長沼や田村松魚ら文学青年たちと集まって文学談義にふけていたという。邦字新聞への投稿を頻繁に行っていたことから、1914 (大正 3) 年、『羅府新報』のサンディエゴ支社の記者となる。ここでは社会部記者として活躍していたようだ。その後、サンフランシスコの『日米』社に移り、1922 (大正 11) 年頃まで記者をしていた。この間に、翁、長沼らと移民地文芸論を交わっていたのである。1922 年以後は、再びロサンゼルスに邦字紙で働いた。この在米時代に、厳格な聖書研究を行う宗教団体ワッチタワー (現エホバの証人) の思想に感銘を受け、1924 (大正 13) 年 4 月、ロサンゼルスに新聞社を辞め、ワッチタワーの伝道者となり、在米邦人を対象に布教活動を行う。そして、1926 (大正 15) 年 9 月には、ワッチタワー総本部の正式派遣により、日本支部を立ち上げるため帰国する。

明石の在米時代の作品は、これまでほとんど注目されていない。彼は明石帆里の筆名で戯曲を数多く寄稿している。1913 (大正 2) 年には「嘘 (一幕) (上) (中) (下)」(2 月 23 日、3 月 2 日、3 月 9 日)、「屋上 (一幕劇) (全 5 回)」(9 月 9 日～17 日)、「最後の時 (一幕二場) (此の一篇を平井櫻川氏に呈す)」(11 月 2 日) を発表している。ここでは、「嘘 (一幕)」と「屋上」についてその概要を記しておこう。「嘘 (一幕)」は、ホテルの客間で 30 歳程の男性と 27 歳の女性が話す場面から始まる。一昨夜、男性は東部から桑港へやって来たが、偶然にもその女性は、男性の友人のかつての恋人であったと気づく。女性は、イプセンの劇を演じたことのある舞台女優で、吉井という男性と恋に落ちたが、演劇という芸術を優先させるために、男を捨てた過去があった。この 30 歳位の男性は、友人の吉井を捨てたこの女性に対して、吉井は傷心し自殺したと告げる。そして芸術家気取りだが真の芸術はわかっていないと彼女を責めた。女性が打ちひしがれたところを見計らって、男は一枚の写真を見せる。それは吉井と吉井の妻の写真であった。実は吉井が死んだというのは嘘で、吉井は日本人の可憐な妻と結婚し、幸せな家庭を持っているのだ。男性は女性の心を打ちのめしておきながら、女性を食事に誘う。困惑した女性に対して男性は、彼女の古い肉をそぎ、新しい肉をつけてやるのだと女性に告げる。

次に「屋上」について紹介しておこう。舞台は夏の晩、海辺に近いカフェの屋上で、男性二人 (甲・乙) が話している。甲には恋人の女性がいて、いつも喧嘩ばかりしている。その間に立って互いの不平を聞かされているのは乙である。乙は甲に彼女との関係をはっきりさせよと提案する。話の内容から、甲は女性と喧嘩別れとなった様子だが、その理由は、女性が別の男性と恋愛関係にあると疑われるからだった。乙は甲に、真の愛は何かという議論を持ちかけ、ただ一人だけを愛するという純粋な恋愛などあり得ないと甲を論ずる。乙は用事を思い出して 5 分ほどその場を去った。そこへ甲の恋人が現れる。女性はもう一度やり直すことを提案するが、結局、それは相応しい時期がきたらと明確な結論は出さないことに、甲と女性は合意した。そこへ乙が戻って来る。そして三人の幸福な未来を祈って乾杯したところで物語は終わる。これらの戯曲に見られる特徴としては、大正時代に日本において文学的なテーマともなった「新しい女」像が、作品の中に表れている点である。また場所は、移民地だろうことは推測されるが、翁らシアトルの青年文士たちが描いたような在米日本人社会独特の生活

ぶりや煩悶が描かれているという印象はあまり感じられない。

特に明石の作品は、イプセンにかなり影響を受けている作風のように思える。長沼と同様に、明石もまた、短編小説よりも戯曲に力を入れていたようで、その描かれているテーマも「真実の愛とは何か」といったより普遍的な主題、また恋愛の成就や穏やかな家庭生活よりも、芸術を究めようとする、個や自由を希求する「新しい女」という主題が描かれている。イプセンは没後 1906（明治 39）年から 1916（大正 5）年頃まで、森鷗外、上田敏、坪内逍遙、小山内薫、島村抱月、岩野泡鳴、夏目漱石、中村吉蔵などの作家に刺激を与え、日本でのイプセン受容は全盛期であったと言われている<sup>33</sup>。明石も、イプセンとイプセンを受容した日本の作家たちの作品から、感化を受けているだろうことはかなり明白である。自分たちの移民地での生活、特に酌婦をめぐる恋愛模様を赤裸々に描くというよりは、イプセンをはじめとする世界の文学に表れる思想や日本の近代文学の潮流に強く影響され、それらの作品の中で取り上げられるような文学的主題を扱っているように思われる。その中で、幾分か、移民地における舞台設定が感じられるが、作品の移民地性というのは全面に押し出されていない。このあたりの特徴は、シアトル時代に青年たちが酌婦を対象とした恋愛に悩み、孤独感や寂寥感に覆われながら異国での生活を送り、彼らの日常を包み隠さず描いた作品と、かなり異なっている。もちろん、サンフランシスコにおける日本料理屋や酌婦たちと文芸人たちとの関係性、またそれらを描いた作品が存在するのかどうかについては、さらなる調査が必要ではあるが、ひとまず『日米』の主要な寄稿家であった長沼と明石の作品においては、そうした移民地社会独特の生活状態を文芸において表現することが、目立った特徴ではなかったということは指摘できそうである。

#### 4. シアトル文壇からサンフランシスコの文芸状況への連続性

##### 4-1. 翁『悪の日影』『紅き日の跡』の『日米』連載

上でまとめたような『日米』における文芸欄の状況下で、翁が『悪の日影』を連載し始めたということは、この『日米』を拠点としていた文芸人たちに、かなりの影響をもたらしたのではないかと考えられる。シアトルの文芸活動の様子、1912（大正元）、1913（大正 2）年における『日米』の文芸欄の特徴、および主要な寄稿者であった長沼、明石の文学的作風を考慮すると、『悪の日影』が移民地性を持っていると高く在米日本人社会の読者たちに評価された意味が、より明確に見えてくるだろう。

『悪の日影』連載終了後、没羽箭（山中曲江の筆名か）が「殊に作者が在米同胞社会の実相を忠実に描写して、我等実際のライフ其物の上に移民地文学を建設しやうとした努力」に対し敬意を表すると述べ、『悪の日影』の短評や感想等を募ると記した<sup>34</sup>。この記事の前後に『日米』に寄せられた感想のうち、紙上に掲載されたものは少なくとも 8 点あったようだが、それらのいずれも、『悪の日影』は、移民地独自の生活をありのままに描いているという点を高く評価していた。例えば、田原紅人は「爛熟した芸術的表現によつて芳烈な若き人々の憧憬的情調を作全体に孕ませて鋭い観察のもとに我等の実生活を解剖」<sup>35</sup>したと述べ、小代生は「異彩ある移民地状態の一部を赤裸々に現わされた」とい

<sup>33</sup> 中村都史子『日本のイプセン現象—1906—1916』（九州大学出版会、1997）。

<sup>34</sup> 没羽箭「『悪の日影』の短評感想等を募る」『日米』1915年9月17日、1面。

<sup>35</sup> 田原紅人「『悪の日影』について（下）」『日米』1915年9月16日、1面。

う点を称賛し、「小説中に活躍する人物は現在の僕等に髣髴するものも見受けた。」<sup>36</sup>と記している。

酌婦をめぐる恋愛事情や青年文士たちの異郷の地で感じる人生への煩悶が、赤裸々に詳細に描写され、読者の大きな反響を誘う作品は、『日米』において『悪の日影』連載まではほとんど見られなかったのではないか。それゆえに、『悪の日影』は、実際の人物の姿を想像させる現実味があり、移民地の生活の現状を読者たちにつきつける衝撃的な作品だったのだろう。そして、『悪の日影』に続き、第二作となる『紅き日の跡』(全93回)(1916年4月10日～7月17日)も連載されていく。これらの作品で、翁が移民地における現実を、包み隠さず描こうとしたことで、1916(大正5)年以降、サンフランシスコの『日米』において、多数の文芸人たちが自分たち独自の文学は何か、移民地文芸とは何かを、真剣に考察していく機運が生まれていったのではないだろうか。

#### 4-2. 1915年末から1917年の移民地文芸論へ—移民地性と普遍性

1915(大正4)年11月頃から1917年は多くの文芸人たちが議論に参加し、移民地文芸論が隆盛を見せた時期であった(資料1)。重要なのは、翁と中西さく子との論争である。翁が主張する移民地文芸論に対して、中西は翁の作品は、酌婦を追い回す男性文士たちを描くことに終始し、そこに世界の偉大な文学作品が有しているような、文明的視点や普遍性というものが見られないと批判した。それに対して翁は、自分たちの生きている移民地社会における日常や現実を材料として、例えそれが移民地の狭い世界の中での些細な内容であったとしても、文学の普遍性を描くことはできると反論し、移民地独自の主題を取り上げることが移民地文芸を成立させるために重要な要素であると主張するのである。彼らの論争については別稿で論じたのだが、この1915年末から1917(大正6)年の間に、彼らが日本の文学のみならず、世界の文学を鏡として、自分たち独自の移民地文芸が何かを議論し合っていたことが窺えた<sup>37</sup>。

長沼もこの移民地文芸論とは何かの議論に加わっている。そこでの主張は、1913年1月1日「選の後に」においては明確にされなかった、移民地独自の作品の必要性という点を強く打ち出すものになっている。長沼は「植民地文学の新意義」<sup>38</sup>において、「近頃在米同胞の中から植民地文学といふ特殊なものを産出さねばならぬといふ所謂アジテータとも目すべき二三の人々の声を聞いた。」と言い、それらの声は理解すべきもので、長沼も賛同すると述べる。しかし、その論点が全体的に抽象的だと批判する。伊藤七司の「在米同胞生活と植民地文学」<sup>39</sup>だけは例外だと説明し、伊藤が「在米同胞は人種、文明、生活の様式を全く異にした米国に渡航し、白人に圧迫されて生活に追われながら淋しく暮らしている」と述べた点、また伊藤が「我々の生活を写すべき特殊な文学の出現を力説された」のが心に

<sup>36</sup> 小代生「『悪の日影』に就て」『日米』1915年10月2日、1面。

<sup>37</sup> 水野真理子「日系日本語文学におけるトランスボーダー性—移民地文芸の探求において」『アジア系アメリカ文学研究の新地平』(小鳥遊書房、2021)、45-58。この論稿では、1916年から1917年にかけての移民地文芸論争において、翁、中西さく子、伊藤七司、長沼重隆、山中曲江らが、世界文学という概念を鏡として、日本文学とは異なる彼ら独自の作品、そして世界の読者に通用する普遍的な特性を持った移民地文芸を作り上げようとしたこと、それにより日本文学という文化的ボーダーを超えようとしていた点を明らかにした。

<sup>38</sup> 長沼重隆「植民地文学の真意義」『日米』1916年6月25日、1面。

<sup>39</sup> 伊藤七司「在米同胞生活と植民地文学—邦人特殊の文学未だ生まれず(全3回)」『日米』1916年5月16日～17日、2面。

残っただけで、他の主張は抽象的な議論に終始していたという印象を持ったという。特に翁の「植民地文芸の使命」<sup>40</sup>については、論理が曖昧で、何のために植民地文芸の必要性を訴えているのか不明瞭になるほど矛盾撞着に陥っていたと、かなり批判的である。そして「現下の在米同胞から意義のある文芸を産出せしめ様とするならば、其の文芸の内容は文明批評の立場からしたものゝカテゴリーに属したものであらねばならぬ。」と続ける。欧米の文学に高い関心と深い知識を有していた長沼の批評眼は、欧米における文学状況を踏まえ、世界を見据えた広い視野に立ったものだったと考えられる。長沼の言葉を続けてみよう。

批評と創作の根底は経験である。米国に来て同胞の状態を識つた文筆の人は他では見られない異常な現象の数多を目撃するだらう。民族と民族との葛藤、文明と文明との衝突、小にしては個人の内的生活の変化、生存上の努力、性慾から来る苦悶、取扱はるべきヴァイタルな問題は多々ある。こうした特殊な境遇に特殊な生活を送つてゐる同胞の数は全世界の人類から見たら、大海の一粟の如きもの<sup>そく</sup>ではあり、それらの問題の骨子が大文芸を貫く核心のそれと比して誠に小さなものであるかもしれないが、人類の歴史における現象の一つとして看過するべからざるものである<sup>41</sup>。

「大文芸」や「全世界の人類」、「人類の歴史」という語彙に注目したい。長沼は移民地において人々が経験している様々な問題は、文学作品の中で取り扱われる重要な問題だとしている。そして移民地の人々の特殊な生活は、全世界の人類から見れば、取るに足らないものかもしれず、それを文学で扱っても、「大文芸を貫く核心」すなわち、偉大な文学作品を貫く重要な主題と比べれば、着目すべきものではないかもしれないと述べる。しかし、在米日本人たちの特殊な生活は、人類の歴史上において重要な現象でもあると主張している。ここからは、長沼が、世界や世界の文学という対象物を想定し、それを鏡としながら、移民地の問題を描く独自性をどう作品に持たせつつ、世界に通じる文学としての普遍性を獲得するかという問題を考へていることが窺える。移民地の独自性を描きながら、普遍的な主題も提示する、それがあべき移民地文芸だという論旨は、1915（大正4）年末から1917（大正6）年にかけて、文芸人たちが盛んに議論した移民地文芸論において、醸成され、辿り着いた一つの結論であった<sup>42</sup>。

1915（大正4）年10月、翁の連載『悪の日影』が終了した後に、長沼は長編小説『霧（全67回）』（『日米』1915年10月13日～12月30日）を朱鳥子の筆名で連載する。この作品は、自伝的な傾向を持つ作品であった。サンフランシスコを舞台に、美術学校に通う文学青年の宇治が、未亡人となって料理屋で酌婦として働く国子と、美術学校の同級生で白人との混血児である時子との間で揺れ動き、苦悩する恋愛事情を描いている。これまで短歌、長詩、劇評などを中心に創作していた長沼が、翁の『悪の日影』に象徴される移民地文芸と移民地文芸論が沸き上がってくる時期に、翁の作風とも相通

<sup>40</sup> 翁久允「私の狭き要求（2）—植民地文芸の使命」『日米』1915年11月28日、7面。

<sup>41</sup> 長沼、「植民地文学の真意義」。

<sup>42</sup> 水野、「日系日本語文学におけるトランスボーダー性」、45-58。

じるような、サンフランシスコの日本人青年をめぐる自伝的な小説執筆を試みたということも、彼の文学が新たな方向に向かおうとしていたことを示唆しているように感じられる。現に、伊藤七司は「在米同胞生活と殖民地文学（3）—邦人特殊の文学未だ生まれず」において、移民地で生まれた注目に値する文学作品は、翁の『悪の日影』『紅き日の跡』そして長沼の『霧』だとし、特に『悪の日影』と『霧』については両作品ともに「芸術に親しむ知識階級の青年を主人公として異色ある植民地の生活を背景としたものである。遠く故国を離れ異国に漂泊し遣る瀬ない淋しい苦悶の多い生活を送つて居る若き人々や植民地の色彩の濃い三味線のある家の女のこと等を描いたもの」<sup>43</sup>として、移民地における青年たちの苦悩を描いた秀逸さを認めている。

明石の作品描写や主題については、何か変化はあったのだろうか。明石は1917（大正6）年8月2日から8月10日まで「汽笛（一幕社会劇）（全9回）」<sup>44</sup>を書いている。この戯曲は、カリフォルニア州のとある田舎を舞台とし、在米日本人会幹事の服部由雄と妻の芳枝がお互い冷ややかな、かみ合わない会話をしているところから始まる。近所の農夫森田の妻が最近失踪してしまったことに話題が移り、芳枝は森田の妻に同情する。森田の妻は写真結婚によってアメリカに来たのだが、夫がアメリカで成功者であるという虚偽に騙され、渡米してしまった。夫婦生活に絶望を感じ幼い子供二人を置いて家を出た森田の妻の心情を、芳枝は慮るが、夫の由雄はそれが自分への当てつけのように感じ、芳枝に反発する。夫の高圧的な態度に耐えかねた芳枝は、自分も森田の妻と同様に写真結婚によって不運な結婚生活をアメリカで送らされていること、この結婚が失敗であったという不満と怒りを夫にぶつける。そして、森田の妻とおぼしき遺体が発見されたという知らせで森田が出かけた後、芳枝も書置きを残し、家を出る。写真結婚という慣習は、移民地社会に家庭的な悲劇をもたらすものでもあった。結婚相手を求めるがために、写真を偽ったり、アメリカでの成功を吹聴することで、日本女性のアメリカへの憧れを掻き立てることで結婚する。渡米後、女性たちは現実を目の当たりにして家出、他の男性と失踪、駆け落ちするなどの家庭的悲劇が、日本人社会では頻繁に起こり、問題視されつつあった。その主題を、明石は戯曲の形式で正面から扱ったのである。

この作品に対して伊藤七司が、インテリではない普通の労働者の生活や、移民地独特の写真結婚がもたらす悲劇を描いているという点を、移民地文芸として高く評価している<sup>45</sup>。明石の作風がどのように変化したのかという点は、まだ更なる調査、分析を行わなければいけないが、1912（大正元）年、1913（大正2）年の頃の明石の戯曲には見られなかった土着的な移民地色が、この1917（大正6）年の「汽笛」に表れている。それは、翁が『日米』に注入したシアトル文学の特徴、移民地の生活をありのままに描くということが、サンフランシスコの文芸人たちにも影響を与えた結果、表出してきた傾向とも言えるかもしれない。というのは、明石は「汽笛（1）」の初めに、なぜこの戯曲を書くに至ったかを次のように説明しているからである。

<sup>43</sup> 伊藤、「在米同胞生活と殖民地文学（3）」。

<sup>44</sup> 明石帆里「汽笛（一幕社会劇）（全9回）」『日米』1917年8月2日～8月10日、1面。

<sup>45</sup> 伊藤生「明石氏の脚本『汽笛』を読みと一所謂「植民地文學」に就ての雑感」『日米』1917年8月11日、1面。

読者諸君に 在米十年、私の耳目は種々多様な悲喜劇に出会しました。然かもその大部分の原因を生んだのは即ち男女間の結婚問題でありまして、特に写真結婚の結果であります。(中略) 曾つて本紙上に於いて翁六溪、長沼其の他の諸氏に依つて所謂植民地文学なるものについて議論されたのを読んだ事があります。私は所謂植民地文学なるものゝ果して何なるやは存じませんが、要は植民地に起こる種々の事相を芸術家の手に依つて再現され、描写された結果の作品がそれであると思ひます。然し悲しい哉、同胞間最大問題の一つである此の結婚問題が未だ一度も芸術家諸子の真摯なる解剖刀の下に在つた事を見ません。等しく芸術を研究しつゝある私が遺憾に思ふのは此の点であります<sup>46</sup>。

もちろん、写真結婚がさまざまな家庭的悲劇を引き起こすものとして、またアメリカの主流社会からも批判の対象となるものとして、意識され始めたという背景的な影響もあるであろう。しかし、1912、1913年頃の明石の作風、1915(大正4)年末から1917(大正6)年にわたる移民地文芸論の議論、それを読んだという明石の説明を考慮すると、明石も移民地文芸を創作するためには、移民地独自の主題をより前面に出して描くことが重要であると捉え、それを実践したのではないかと考えられるのである。

## 5. まとめ

本稿では、邦字新聞デジタルコレクションに収められている新聞、雑誌資料を活用しながら、これまでの先行研究における課題となっていた、地域間の文学活動の連続性やつながりについて、途中経過の報告ではあったが考察を試みた。特にシアトルの文学青年たちによる文学活動を再考し、シアトルからサンフランシスコの『日米』を主軸とする文学活動へ、どのような人の流れが見られたか、また両者の違いや、シアトルからサンフランシスコの文学状況に与えられたと考えられる影響について考察した。シアトルにおいては、青年文士たちが彼らの生活をありのままに赤裸々に描こうとする文学的傾向があった。その一方、サンフランシスコの同時期においては、まだ移民地性を前面に出すという目立った動きは見られず、日本や欧米の文学思潮に傾倒している様子が窺えた。その後、シアトルから、山中のような編集人、また翁のような若い作家がサンフランシスコ周辺に移動したことによって、移民地文学とは何か、それが移民地独特の特徴を文学に描くことなのか、その手法や描写はどうあるべきなのかという問題を論じ合うことにつながったと考えられる。今回扱った文芸人たちについての作品の特徴や、また新聞、雑誌に掲載されている作品の数量的把握、質的特徴の分析は残された課題であるが、本稿で試みたように、邦字新聞デジタルコレクションによって、これまで不明瞭であった文芸活動の動きがより明確になり、初期移民地文学の様相が一層明らかにされることが期待される。

<sup>46</sup> 明石帆里「汽笛(1) —一幕社会劇」『日米』1917年8月2日、1面。

【資料1】『日米』移民地文芸関連記事リスト

日時（面）	タイトル	著者
1915.11.21(11)	私の狭き要求（1）帽子を捨て、新聞の改良	翁六溪
1915.11.28(7)	私の狭き要求（2）植民地文藝の使命	翁六溪
1916.5.15(2)	在米同胞生活と植民地文學（1）邦人特殊の文學未だ生まれず	伊藤七司
1916.5.16(2)	在米同胞生活と植民地文學（2）邦人特殊の文學未だ生まれず	伊藤七司
1916.5.17(2)	在米同胞生活と植民地文學（3）邦人特殊の文學未だ生まれず	伊藤七司
1916.6.18(9)	生れ来らんと為つゝある植民地文學のために	南 国太郎
1916.6.25(1)	植民地文學の真意義	長沼重隆
1917.1.26(4)	婦人の見たる加州の文藝界(1)	中西さく子
1917.1.27(4)	婦人の見たる加州の文藝界(2)	中西さく子
1917.1.28(4)	婦人の見たる加州の文藝界(3)	中西さく子
1917.1.29(4)	婦人の見たる加州の文藝界(4)	中西さく子
1917.1.30(4)	婦人の見たる加州の文藝界(5)	中西さく子
1917.1.31(4)	婦人の見たる加州の文藝界(6)	中西さく子
1917.2.5(4)	移民地文藝雑感—中西さく子氏に—(1)	翁久允
1917.2.6(4)	移民地文藝雑感—中西さく子氏に—(2)	翁久允
1917.2.7(4)	移民地文藝雑感—中西さく子氏に—(3)	翁久允
1917.2.8(4)	移民地文藝雑感—中西さく子氏に—(4)	翁久允
1917.2.9(4)	移民地文藝雑感—中西さく子氏に—(5)	翁久允
1917.2.10(4)	移民地文藝雑感—中西さく子氏に—(6)	翁久允
1917.2.15(4)	移民地文藝に就て—翁六溪様にお答へ申す(1)	中西さく子

1917.2.16(4)	移民地文藝に就て—翁六溪様にお答へ申す(2)	中西さく子
1917.2.17(4)	移民地文藝に就て—翁六溪様にお答へ申す(3)	中西さく子
1917.2.18(4)	移民地文藝に就て—翁六溪様にお答へ申す(4)	中西さく子
1917.2.22(4)	編輯上より見た所謂移民地文藝一人と時と場所とを離れて文藝無し(1)	没羽箭
1917.2.23(4)	編輯上より見た所謂移民地文藝一人と時と場所とを離れて文藝無し(2)	没羽箭
1917.2.26(4)	編輯上より見た所謂移民地文藝一人と時と場所とを離れて文藝無し(3)	没羽箭
1917.2.27(4)	編輯上より見た所謂移民地文藝一人と時と場所とを離れて文藝無し(4)	没羽箭
1917.2.28(4)	編輯上より見た所謂移民地文藝一人と時と場所とを離れて文藝無し(5)	没羽箭
1917.03.01(4)	編輯上より見た所謂移民地文藝一人と時と場所とを離れて文藝無し(6)	没羽箭
1917.3.2(4)	編輯上より見た所謂移民地文藝一人と時と場所とを離れて文藝無し(7)	没羽箭
1917.8.22(1)	移民地文芸と移民地の生活(1)	翁六溪
1917.8.23(1)	移民地文芸と移民地の生活(2)	翁六溪
1917.8.24(4)	移民地文芸と移民地の生活(3)	翁六溪
1917.8.26(4)	移民地文芸と移民地の生活(4)	翁六溪
1917.8.27(4)	移民地文芸と移民地の生活(5)	翁六溪
1917.8.28(4)	移民地文芸と移民地の生活(6)	翁六溪
1917.8.29(4)	移民地文芸と移民地の生活(7)	翁六溪
1917.8.11(1)	明石氏の脚本『汽笛』を読みて—所謂「植民地文學」に就ての雑感	伊藤生
1918.1.20(4)	「日米」新年号文藝作品拝見—道上、翁、中西、大谷諸氏の作を読みて	南山老人
1918.1.30(1)	在米日本人主義(1)	翁六溪
1918.1.31(1)	在米日本人主義(2)	翁六溪
1918.2.1(1)	在米日本人主義(3)	翁六溪

1918.2.2(1)	在米日本人主義(4)	翁六溪
1918.2.3(1)	在米日本人主義(5)	翁六溪
1919.9.29(4)	移民地文藝の宣言	R・K・O (翁久允のこと)
1919.10.6(4)	呼び寄せ青年の悲哀—移民地文藝に現れた印象	R・K・O (翁久允のこと)
1920.1.1(33)	移民地文藝雑感—小説の選をしつゝ	翁六溪

本稿は、JSPS 科研費 20K00412 の助成を受けたものである。

水野真理子

富山大学教養教育院